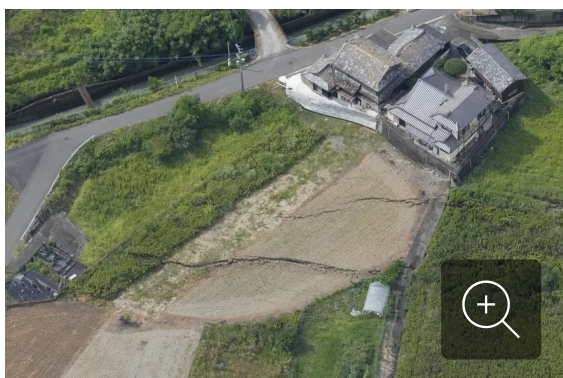


始まりは未知の小断層か 熊本震度7、見えてきた破壊プロセス

独自  菅沼舞  垂水友里香 社会 | 最新記事 | 気象・災害・交通 | 科学・テクノロジー

毎日新聞 | 2026/8/2 16:00 (最終更新 8/2 16:15)  有料記事 1101文字

メモを追加する



地震後に畑に現れた地割れ＝熊本県八代市で2026年7月29日午前9時26分、本社ヘリから

熊本県で7月28日に発生したマグニチュード（M）7・1の地震は、これまで知られていなかった小さな断層から破壊が始まったとの解析結果を、筑波大の八木勇治教授（地震学）がまとめた。この初期破壊が隣接する大きな断層に伝わり、大地震に発展した可能性が高いという。

4秒で大断層に到達

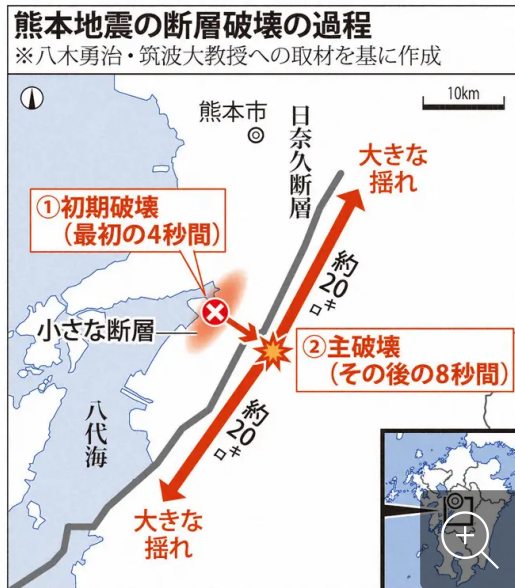
地震は日奈久断層帯（全長約80キロ）の北東部で発生し、熊本県宇城市と氷川町で最大震度7を記録した。

八木教授は、国外の観測網でとらえた地震波を解析し、付近の断層の形状や滑りがどう進展したかを推定した。

解析によると、日奈久断層帯の主断層（日奈久断層）の北西に隣接する、小さな断層で破壊は始まった。深さ約16キロから南東の浅い方向へ破壊が伝わり、約4秒後、日奈久断層に到達。日奈久断層は約8秒かけて北東方向と南西方向にそれぞれ約20キロ、計約40～50キロ割れたと推定されるという。破壊の進行方向で揺れが強くなり、大きな被害をもたらしたとみられる。

日奈久断層帯は北から「高野一白旗」「日奈久」「八代海」の三つの区間に分かれる。破壊が始まった小さな断層は日奈久区間に位置するが、既知の活断層を網羅した地図には載っていないという。

南の区間に「割れ残り」



熊本地震の断層破壊の過程

2016年の熊本地震では、初めに日奈久断層帯の北部でM6・5の地震が起き、その28時間後、隣接する布田川断層帯でM7・3の地震が起きた。八木教授は「タイプや時間スケールは違うものの、今回も10年前の地震も、一つの断層の破壊が隣接する大断層に影響を及ぼして大きな破壊につながったという点で共通する」と指摘する。

その上で「活断層が複雑に入り組んだ地域では1回で地震が終わらず、何度かに分けて起きることがある。八代海区間は割れ残っており、十分注意が必要だ」と話した。

再び割れた可能性

1949年に「震度7」の階級が設けられてから国内で発生した計8回のうち、3回が熊本地震の震源域で起きたことになる。

広島大の熊原康博教授（自然地理学）は28日の地震発生直後から被災地に入り、日奈久断層帯を調べている。調査エリアのうち高野—白旗区間では、16年の地震でずれた箇所が今回の地震でも約20センチずれ動いたことが分かったという。

今回の震源と周辺の活断層の位置

※地震調査委員会と地震調査研究推進本部、気象庁の資料を基に作成



今回の震源と周辺の活断層の位置

熊原教授は「一般的に断層は一度動いたら1000年は動かない。非常に珍しく、驚いている」と語る。10年という短期間で再び割れた理由について、「断層のまっすぐな形状や、近くに布田川断層があることが影響している可能性がある」と分析した。地表に姿を現した地震の痕跡が同じでも、地下に延びる断層は異なる場合があり、今後調査が進められる。【垂水友里香、菅沼舞】



地震後に現れた地割れ。手前は南九州自動車道＝熊本県八代市で2026年7月29日午前9時22分、本社ヘリから

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.